

# 命が軽んじられる今こそ、死について考える

「memento mori 静岡 2000」「死」をみつめ、「今」を生きる」と題されたセミナーが、10月17日浜名湖競艇場サンホールで開催された。日本財団主催、笹川医学医療研究財団、ライフ・プランニング・センター共催によるこのセミナーは、ガン末期やエイズ患者に対して行われるホスピスケア、緩和医療の普及・啓発を目的としたもの。日本財団はこれまでホスピス施設の建築費助成を行ったり、ホスピスケアを行う医療スタッフの養成講習や研修会への支援などを行ってきたが、一般市民を対象にした啓発活動の一環として、昨年の長崎、9月の香川に引き続き、静岡でのセミナー開催となった。

memento mori  
静岡 2000

日本財団  
The Nippon Foundation

## 人生に有終の美を 生き方の選択



日野原重明氏  
聖路加国際病院理事長  
74年聖路加看護大学学長に就任。  
医師に任ぜられずに「患者参加の医療」が持論。

私は22歳のとき結核を患い、1年間の療養生活を余儀なくされた。医学生だった私は「同級生たちから後れをとってしまつた。医者として成功するのは難しいだろう」と思い悩んだものだ。療養が終わっても、暗い気持ちの私は「憂鬱」というタイトルの小説を書き、出版社に送った。結局その小説は日の目を見ず、私はその後医者の道を進むことになった。

当時私は療養生活によって貴重な1年間を失つたと感じていた。しかし今振り返ると、それがあつたら病んでいる人の気持ちが理解できるようなつたのだと思う。フランスの哲学者が「健康なとき、哲学者でさえも、自分がこの世に存在していることに驚かない」といつ

と声をかけると、ばつちりと目を開き笑顔を見せながら「痛みはあつたけれども、先生と出合えて死の準備をさせてくれた。感謝しています」と話してくれた。私はそれこそ「死への勝利」だと感じる事ができた。

私は最近「フレイディから学んだこと」という舞台の脚本を書く機会を得た。アメリカの哲学者レオ・バスキアが著した童話「葉っぱのフレイディ」を題材に、私の思いのま

夫は生涯に10回入院し、8度の手術を経験した。そのとき体験した「これはちよつとひどいものではなかつたか」ということを読売新聞に「患者からのささやかな願い」と題して連載したのが、「心あたたかな医療」運動を始めるきっかけとなった。

夫の病状は、糖尿病から腎炎、脳内出血へと進み、最後の1年半は言葉も失つてしまった。冗談を言つて人を笑わせるのが好きであつただけに、話せない夫の辛さはいかばかり

夫の最後は、誤飲した流動物が肺に入つたことが原因であつた。主治医は人工呼吸器をつけるから家族は病室から出てほしいという。私たちに選択の余地はなかつた。しかし奇跡は起こらず、翌日呼吸器をはずす承諾を求められることになる。パチンとスイッチが切れる音を、私は生涯忘れることができないかもしれない。

私がそのときできたことは、夫にふたがなれた。たくさんのお手紙を抜いてくれと頼むことだけだつた。夫からチューブがすべて除かれた瞬間、「オレはいま光の中に入つた。お袋にも兄貴にも会つたから心配するな」という言葉で、夫は静かに息を止めた。

最近、医療費の高騰を抑えるためと称して、高齢者をまるで荷物のようになつて移動させられることが行われている。頼むくば、夫が提唱した「心あたたかな医療」が今後も引き継がれることを願つてやまない。

## 「心あたたかな医療」を求めて



遠藤順子氏  
エッセイスト  
夫・遠藤周作氏の闘病生活をつつた「夫の宿題」を98年に上梓。今年1月に「再会 夫の宿題 それから」を出版し好評を博す。

喉をした人が多いことに驚くと同時に、これはちよつと準備不足なのではと思わせるものもあつた。突然あつた何カ月かの命と、医師から宣告されたら、患者本人も家族も気が動転してしまふ「すべてお任せします」といつてしまふのは仕方ないことかもしれない。しかし、任せるといつた後で「本当はこうしてほしかった」と不満をいつても手遅れ。そう

種村 6年半前、がんの告知を受け、5年生生存率は20%以下と宣告された。以前、夫から「がんとかわかつたら教えてほしいか」とたずねられたとき、いやだと答えた。怖くて知りたくなかつたからだ。しかし、胃の全摘出手術を受けて以降は、自分の体のこと、命のこと、1回きりしかない人生のことを他人任せにしないことに決めた。

性教育の必要性が叫ばれ、数多くの優れた絵本が出版されたように、子供たちが普通に死について語れるようにと「いのちの授業」を続けている。千原 以前の私は遠藤順子さんに叱られるような医師だつた。ホスピスに勤務するようになって19年目を迎えるが、患者さんなどからホスピスは天

国みたいなどころだと言われる。勤務しているのは同じ人間なのに、なぜ評価が逆転したのか、私自身わからずにいる。その答えを見つめる手助けとして、3人の患者の話をした。1人は、ホスピスに勤務する前に担当した20代後半の女性。肺がんに冒され、酸素 TENT にくるまれた入院生活だつた。ある日、彼女が呼んでいてというので、苦しみを取り除いてほしいといわれるのかとビックリして病室を訪れると、彼女から「先生の信じてほし様に一緒に祈りしてほしい」と頼まれた。2人は、生まれながらに肋骨が数本欠けていた女の子。成長するにつれ体がどんどん左に曲がついていった。中学生の時手術を勧めたが、両親からもらった体だからこのままでもいい」という。両親が大変だから車でするとい

という一言を残してこの世を去つた。残された妻はいままでの苦勞はすべて報われたと感じたという。3人が語っているのは、自分はどこへ行けばいいのかわからなかったのか、残された人と和解できたかということだ。水野 私の勤務するホスピスが開設される前に亡くなった、43歳の女性患者から送られた手紙を紹介したい。太陽、肺卵巣をがんが冒され、大学病院から手の打ちようが



千原明氏  
聖隷三方原病院  
聖隷ホスピス所長  
68年新潟大学医学部卒。82年から聖隷三方原病院聖隷ホスピス副所長に就任。88年から現職。

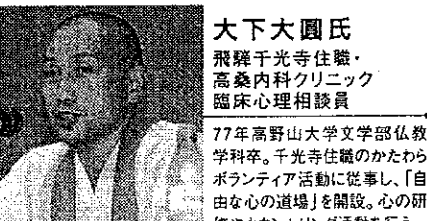
くないし、イエス・キリストが天から迎えに来てくれる喜びの時だと語り、1カ月後に亡くなった。信仰を持てない私は図書館に通い、先人が書き残した文章を読みふけた。しかし、いよいよ癒されたのは、ホスピスに入院している患者たちが、最後の時間をしっかりと見つめ、周囲に感謝の言葉を残して亡くなる姿だつた。南 感動的な死が語られることが多いが、普通の死があつていいのでは。水野 体重が30キロ台に



南砂(まさこ)氏  
読売新聞解説部次長  
79年日本医科大学医学部卒。ベルギー国立セント・ルイス大学研究員。日本医科大学助手を経て、85年読売新聞に入社。医療、年金、福祉、教育分野を中心に活動。

南 まず「死」をみつめ、「今」を生きる」というテーマについて、各パネラーの思いと自身の立場を話していただく。

大下 地域的なつながりが強い土地柄の飛騨高山で、精神的なケアに携わっている。近代ホスピスの4つのアプローチは、肉体的・心理的・社会的・スピリチュアルな苦痛にいかに対処するかが、私が担当するのは心理的苦痛とスピリチュアルな苦痛だ。ただスピリチュアルをキリスト教的に「霊的」といつてしまつと少し違うように感じる。



大下大園氏  
飛騨高山大学文学部教授  
77年高野山大学文学部教授。教職課程、心理学、看護学、ボランティア活動に従事し、自ら心の道場を開設。心の研修やカウンセリング活動を行う。

うのも聞かず、バスで学校へ通つた。高校3年生のとき「私が生まれてきたのは意味があつたよ」という言葉を残して、この世に別れを告げた。3人はホスピスに入院していた50代の男性。妻に暴力を振るい、自分の身の上を嘆いてばかりだつた。ところが死の前日「オッケー、世話になつたな」といつた。

南 死と宗教は切り離せないという意見が強い。大下 従来、仏教では死後の世界が中心で、末期患者に呼ばれて病室を訪れることはなかつた。信仰を持たない人たちがかわる中で、人は死を見つめたときに、スピリチュアルな部分が高められるように感じる。宗教はそれを助ける側面があるが、必須ではないだろう。

千原 誤解されている部分が多いが、聖隷三方原病院聖隷ホスピスに入院

なつた女性には、「こんなになつても生きていていいの？ みんなはどんなふうになつたの？」と毎日問いかけ、きた。ある日、声が出なくなつた彼女がスタッフに何かを必死に訴えていたが、誰にもわからない。私はふだんの彼女の様子から最後のお別れを言いたいのだと確信し話しかけた。ところが彼女が遠くを歩いている。実はアイスクリームが食べたかつたのだ。みんなホッと力が抜けた。彼女はスプーン一杯のアイスをとてもおいしく口にほおばつた。劇的な死「よりよく」「平凡な日常」がホスピスにある。

南 最近の少年による凶悪犯罪などを見ても、命の大切さを伝えるために、教育や医療の現場での取り組みが、いかに大切かを実感できる、みなさんの話だつたと思います。